

当院における漢方診療の実際

“おっばい育児”を サポートする漢方薬

医療法人至誠会 梅田病院

理事長 梅田 馨先生

1966年 関西医科大学 卒業
1967年 インターン後、
関西医科大学 産婦人科学教室 入局
1971年 医療法人至誠会 梅田病院 副院長
1981年 同 理事長 院長
1998年 同 理事長



産婦人科 手嶋 咲子先生

2005年 琉球大学 卒業
同 年 鹿児島市立病院(臨床研修)
2007年 鹿児島市立病院 産婦人科 入局
(産婦人科・麻酔科・NICUにて研修)
2010年 医療法人至誠会 梅田病院



山口県光市では1976年から母乳育児を推進し、さらにその活動は、より豊かな子育てのために胸でしっかりと子どもを抱きしめ愛しむふれあいの子育て“おっばい育児”の推進へと広がり、現在の「おっばい都市宣言のまち」につながっている。背景には、長年にわたって母乳育児の推進役としてご活躍され、地域の子育てに大きく貢献されている医療法人至誠会 梅田病院 理事長の梅田馨先生が存在が欠かせない。そこで、母乳育児の推進はもちろんのこと、妊産婦のために広く漢方治療を取り入れている同院の梅田理事長と産婦人科の手嶋咲子先生に、母乳育児、漢方治療、さらには産婦人科医療のこれからのあり方まで、幅広く伺いました。

『おっばい育児』の推進役として

梅田 当院は、私の父が1946年に開院し、以降70年以上にわたって当地の産婦人科医療に携わっています。

私が医師になった当時、ミルク育児と早期からの離乳食の開始が推奨されており、母乳育児は廃れていました。しかし私は、母乳育児が否定されることに“何かおかしい”と感じていました。そこで、現在も当院で活躍してくれている助産婦の長安さん(現在は名誉師長)と相談して母乳育児の推進をスタートさせました。その後も紆余曲折はありましたが、地域の保健師さんなど多くの方々にもご協力をいただき、それが光市における『おっばいまつり』の開催(1994年)、そして『おっばい都市宣言』(1995年)につながりました。

当院は1997年、『BFH(Baby Friendly Hospital)』にわが国で7番目に認定されました。これは、WHOとユニセフが提唱している「母乳育児を成功させるための10ヵ条」を長期にわたって遵守し実践する産科施設を「赤ちゃんにやさしい病院」として認定するもので、現在わが国では約70施設が認定されています。

さらに育児において大切なことは、お母さんが赤ちゃんに与えることができる“心の栄養”です。当院では母乳育児

をめざして、また育児の楽しさ、親子の絆の大切さを感じてもらえるように、様々な支援を行っています。

私は、当院が女性の一生に寄り添う病院として、“This is your home”という想いがあります。そして、病院らしくない病院にしたいと考え、建築の際、設計には隈研吾氏、院内のサインシステムのデザインには原研哉氏に携わっていただきました。

手嶋 現在、当院は梅田理事長以下、産婦人科医5名と小児科医1名の体制で日々の診療を行っています。特に小児科の先生が常勤されているので、お母さんの出産後の診察を兼ねてお子さんのちょっとした心配事も相談できます。

また、各種の教室の開催はもちろんのこと、初めての妊娠・出産を経験される方たちが親睦を深めながら楽しい時間を過ごしていただく教室の「うめとも」、ご家族の赤ちゃん・お母さんとの関わり方をご理解いただくための「JBP(じじ・ばば・パパ)教室」なども定期的に開催しています。

産婦人科診療において使用頻度が高い補剤

手嶋 女性は、思春期、妊娠中から出産後、そして更年期と女性ホルモンの変化による体力面、心理面での大きな波がありますが、漢方薬はそのいずれをもサポートできる選

択肢があります(表)。また、妊娠中や授乳中には服用できる薬剤に制限がありますが、漢方薬の多くはそのような場面でも比較的安心して使用できるという利点があります。

使用頻度の高い漢方薬に十全大補湯があります。これは、気と血を補う作用があるので、妊娠中や産後の育児で、身体だけでなく精神的に疲れている方に良いお薬です。さらに、体力の低下と精神的なストレスで血流が悪くなって乳汁の出が悪いという方にも有用です。

人参養栄湯も十全大補湯と同じように気と血を補う漢方薬ですが、特に気持ちの落ち込みが強い方や、胃腸症状の強い方に使用しています。

一方、更年期以降で使用頻度が高いのが補中益気湯です。疲労を訴える方、子宮脱や骨盤臓器脱にお悩みの方に使用すると“疲れなくなった”、さらに長期的に使用することで“脱の症状で悩まなくなった”という方を経験しています。

産後の気分の落ち込みに対する漢方治療は赤ちゃんにも好影響

手嶋 最近はまじめなお母さんが多いためか、お子さんの夜泣きや、家事と育児の両立などで精神的に追い詰められてしまい、“つい、子供に当たってしまう”とおっしゃる方が少なくありません。そのような方には抑肝散加陳皮半夏を使用します。そうすると、お母さんが落ち着くだけでなく、泣いていた赤ちゃんも落ち着くというように、赤ちゃんにも良い影響があります。抑肝散加陳皮半夏を服用することで、落ち着いた気持ちで赤ちゃんを抱きしめ、やさしく語りかけることで、抱かれている赤ちゃんはお母さんの愛情をしっかりと受け止めることができるというように、お互いに良い影響があることを、私自身も実感した経験があります。また、初めての妊娠で身体も大きく変化するこ

表 梅田病院で使用される主な漢方薬

処方名	主な対象疾患・病態
十全大補湯	妊娠中や育児における体力面・精神面の低下、乳汁分泌低下
人参養栄湯	十全大補湯の対象で、さらに精神的な落ち込みが強い、胃腸症状が強い
補中益気湯	更年期で活力の向上を希望、脱症状の訴え
抑肝散加陳皮半夏	産後のイライラ
半夏厚朴湯	妊娠中、産後の不安感
葛根湯	乳腺炎、育児期の肩こり
当帰芍薬散	リトドリン塩酸塩による心悸亢進(動悸)



とに対する戸惑いや周囲の環境の変化に不安を感じられているような方には半夏厚朴湯を使用します。

しかも、抑肝散加陳皮半夏や半夏厚朴湯を服用することで、今まで服用していた抗うつ薬や睡眠導入剤などの服用を中止できた方を経験しています。漢方薬は身体全体に対してゆっくりではあっても作用することで、症状が改善したのではないかと考えています。

また、葛根湯が乳腺炎に有用であることは広く知られていますが、産後のお母さんは常に赤ちゃんを抱いているために肩こりが酷いことから、乳腺炎と肩こりの改善を目的に葛根湯を使用します。

産婦人科医の担う役割は大きい

手嶋 子どもの虐待に関する報道を目にする機会が増えたように思います。お子さんとご両親との関わりに、私たち産婦人科医が何らかの形で介入できれば、親子に起こる不幸を未然に防ぐことができるのではないかと、という想いがあります。妊娠前には、本当に赤ちゃんが可愛いと思えるときに妊娠できるサポート、妊娠後には無理なく育児ができる環境作りのサポートなど妊娠前後をとおした関わりによって将来の虐待を回避できるのではないかと感じています。そのような観点から、産婦人科医が担う役割は非常に大きく、産婦人科医は世の中を変えるくらい大きな仕事をしているのだと思っています。

梅田 産科医療は世の中の原点になると思います。私は、元気なお子さんを出産していただくためにできる限りのサポートをしたいと思っていますし、さらにそのお子さんを元気に育てることができる社会作りに少しでも貢献したいと思っています。

取材：株式会社メディカルパブリッシャー 編集部 写真：橋本正弘